

研究結果報告書

韓国における日系新宗教の受容にみる外的要因に関する考察

所属：東西大学校 大学院 日本地域研究科

役職：教授

氏名：李 元範

本研究の目的は、約200万人といわれる韓国内の日系宗教信者集団の人口学的特性および社会意識に対する検証を通じて、韓国社会における日系宗教の位相を確認し、そうした活動が今後政治・社会・文化に及ぼす影響について予測することである。その作業として、①文献・資料調査、②現地訪問と参与観察、③アンケート調査、④深層インタビュー調査を行い、(1)各教団の類型化作業、(2)各教団の組織運営方式と信者の人口学的特性の把握、(3)日系宗教信者の社会的態度および社会参加の把握、(4)韓国宗教文化における日系宗教の社会的役割について検討を行った。

調査の結果、まず、韓国における日系宗教は、宗派(教派)、韓国で布教が開始された時期(戦前・戦後)、布教地域(ソウル、釜山、大田、済州など)、在日コリアンの親戚の有無、日系宗教に(転向)した人々の学歴・職業によって、それぞれ差異があることが確認できた。また、日本本部とのつながりを強調するところ(韓国天理教、真如苑等)と、韓国独自の組織運営方式を強調するところ(大韓天理教等)、日本の聖地訪問の有無によって、信者たちの「対日観」において差異(反日・親日)があり、これにより韓国社会に対する社会的態度および社会参加の形式(積極的・親和的/中立的・無関心/消極的・批判的)に大きく影響を与えていることがわかった。ただし、韓国社会に対する態度においては、日系宗教への(転向)を通して、否定・批判から肯定に転じた信者の割合が圧倒的に多かった。

すなわち、日系宗教の宗教観(現世中心主義)や信者たちの対日観、聖地訪問の有無、日本本部との関係性などによっては、今後、既存の韓国社会ネットワークから離れ、(排他的な独自の?)集団を形成する可能性がある教団もあると思われるが、現時点では、韓国社会の政治、社会、文化との軋轢を起こす可能性は非常に低いことが確認できた。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「植民地時代における日系新宗教の輸入と拡大に関する研究」、李元範、韓国日本近代学会、2016年10月29日、APU大学(日本九州)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「韓国における日系新宗教信者の社会意識に関する研究」、李元範、新宗教研究36集、投稿予定(2017年2月上旬締め切り)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)